

聖書：Iサムエル6：1～21

説教題：だれが主の前に立ちえよう

日時：2015年11月22日（夕拝）

前回はペリシテ人の町に大変な災いが下りました。彼らはイスラエル人との戦いに勝って主の契約の箱を持ち去りましたが、それが運び込まれた町には次々に主の災いが下りました。人々には腫物ができ、町の叫び声は天にまで上りました。彼らにとって解決方法はただ一つ。神の箱をイスラエルに送り返すことです。彼らは自分たちの国の祭司と占い師たちに、どのようにこれを行なったら良いだろうかと相談します。占い師たちは言います。「何もつけないで送り返してはなりません。彼に対して償いをしなければなりません。」彼らの提案は面白いものです。5つの金の腫物と5つの金のねずみを形造って、それを神の箱につけて送るようと言います。当時の人々の間では、取り除きたいものを形にして造って、それを自分たちのところから外に送り出せば災いも一緒に出て行くという考えがあったようです。彼らは自分たちの体にできた腫物とそっくりの金の像と、おそらくその病気を媒介したねずみの金の像を大真面目に造って、この災いときようならをしようとしたのでしょう。その際、かつてのエジプト人とパロの姿に触れて、彼らのように頑なな態度を取ってはならない、彼らのようにさらに災いを招くようなことがあってはならないと警告します。まるでイスラエルの預言者のようなアドバイスです。

しかしこれが本当にイスラエルの神、主による災いなのかを知るために、彼らは一つの方法を提案します。まず一台の新しい車とくびぎをつけたことのない2頭の雌牛を用意します。新しいのは、これが神聖な用途に用いられるからです。そして用意する牛は乳を飲ませている雌牛でなければならない。その雌牛を神の箱と償いの金を乗せた車につないで行くがままにさせる。普通なら牛はどう行動するのでしょうか。乳を飲ませている雌牛ですから当然、牛小屋にいる我が子のところへと戻って行って乳を飲ませようとするでしょう。しかしもしこの2頭がイスラエルへの道、ベテ・シメシュへの道を上って行くなら、確かにこれは神の御手によるものだと思わなければならない。ペリシテ人がそのようにするとどうだったのでしょうか。何と雌牛は「鳴きながら」ベテ・シメシュへの一筋の大路をまっすぐ進み始めます！「鳴きながら」というのは、おそらく子どものところに帰りたい、わが子の所に行って乳を飲ませてやりたい！という牛の叫びだったのでしょう。私はイスラエルの方ではなく、牛小屋の方に行きたいのだ！それは雌牛の本能です。ところが2頭は右にも左にも全くそれず、まっすぐにベテ・シメシュへの道を進んで行ったのです。

ここに主こそ一切のことを御手に治めて導いておられる真の主権者である事が示されています。4章の戦いで主は弱々しく見えました。主の箱は敵に持ち去られ、今や恐れるに足りないただの箱のようでした。しかしペリシテ人がだんだん分かってきたことは、その考えは正しくないということです。神の箱が安置されたダゴンの宮では、ダゴンが二度に渡ってひれ伏し倒れ、ついにはバラバラになりました。また神の箱が行くすべての町には死の大恐慌が起きました。そして今、2頭の雌牛が鳴きながらも、神の箱をイスラエルに運ぶためにまっすぐ進んでいる！彼らはここに人間の目には見えないけれども、強力な御手をもってこの状況すべてを支配し、導いているお方がおられることをはっきり見たのです。

これは同時にイスラエルにとっては大きなあわれみの現れでもありました。主は本来、イスラエルのところに戻って来られなくても良かった。ペリシテ人の地で一人で栄光を現わして、そのまま他のところへ出て行かれても良かった。しかし主はこうしてイスラエルに戻って来て下さったのです。イスラエルが悔い改めたから、ではないのに、そのようにして下さったのです。ここにも「救いはただ主から来る」という真理が示されています。ベテ・シメシュの人々は、神の箱が戻って来る様子を見て喜びました。主は再び我々とともにいてくださる！これは彼らにとって言葉に表し切れない慰めです。彼らは車の木を割り、雌牛を全焼のいけにえとしてささげて、この大いなる祝福の日を喜び祝いました。

ところが話はめでたしめでたしで終わりません。19節からのところには、全く予期しなかった悲劇的な出来事が記されます。何と神の箱が到着したベテ・シメシュの多くの人々が主に打たれたのです。19節に、それは彼らが「主の箱の中を見たからである」とあります。主の箱は聖なる神ご自身を象徴するものとして、見てはならないものとされていました。民数記4章20節：「彼らが入って行って、一目でも聖なるものを見て死なないためである。」ここはケハテ族の奉仕について注意事項が述べられているところです。彼らは契約の箱や机、燭台、祭壇、垂れ幕などに関する奉仕の務めを与えられていましたが、彼らが天幕に入って行ってその奉仕をする前に、アロンとその子らが、それらを色のついた布で覆わなければならないと言われていました。それは彼らが目でも見て死んでしまうことがないためです。それほど神は聖なるお方であるということです。宿営が移動して天幕を運ぶ時も、アロンとその子らは、ケハテ族が作業を始める前に、これらのものをまず布で覆わなければなりません。ケハテ族はこのことを心に留めて、間違ってもその覆いをめくって中を見てはなりません。触れてもならなかったのです。ところがベテ・シメシュの人々は軽率にも箱の中を見ました！ある人は、ペリシテ人が金の贈り物を付けて来たので、箱の中にも何か入っているのではないかと覗いたのではないかと言います。またある人は、箱が自分たちの町に来たついでに普段は見る事が許されていない箱の

中をじっくり見ておこうという好奇心で見たのではないかといます。また同情的な人は、ペリシテ人が箱を送り返してきたものの、果たして中身はしっかりあるかどうかを確かめようとしたのではないかといます。いずれにせよ、彼らの取ったこの行動はあまりに軽率でした。そこで大変なさばきが彼らに下ったのです。

これが示していることは何でしょうか。それは聖なる主は、ペリシテ人にとって危険であったと同様にイスラエル人にとってもそうだとことです。主はペリシテ人には災いを下すが、イスラエル人には下さないというお方ではない。神はキリストを信じないこの世の人の罪は厳しく取り上げてさばかれるが、私たちクリスチャンに対しては大目に見て、優しく、緩く取り扱ってくれるだろうと考えることはできないのです。正しくないなら主を信じる民も同じように打たれるのです。

では一体この時の何が彼らの問題だったのでしょうか。それは一言で言えば、聖なる主への恐れ敬いが欠如していたということでしょう。本来イスラエルは先の敗北の経験を通して、自分たちのあり方をふり返り、御前に悔い改めるべきでした。心が主から離れており、その上、主を都合良く利用しようとした態度を悔い改めるべきでした。そんな罪を犯した自分たちのところに主がご自分から戻って来て下さったことを見た時、彼らは一層の恐れを抱いて礼拝すべきでした。ところが彼らが示した反応は何でしょうか。いやー、神の箱が私たちのところに戻って来て良かった！また祝福が戻って来て良かった！と言って喜ぶのみ。そしていいかげんな気持ちで神の箱をじろじろ見たり、この際！と言ってその中を覗いたり・・・。神への恐れが全くありません。こんな調子ではまた神を都合良く利用するだけではないでしょうか。そんな彼らに主の激しいさばきがくだったのです。

しかしここには良いことも生じています。ベテ・シメシュの人々は20節で「だれが、この聖なる神、主の前に立ちえよう。」と言いました。イスラエル人はここでサムエル記に入って初めて、自らをわきまえた言葉を発しています。自分たちの罪を認識しています。死んだ人たちだけが悪かったとは思っていません。我々みな、この聖なる神の前には立ちえない者たちだと告白しています。そしてこの主の前での正しい恐れから、次回見るように彼らの悔い改めが導かれます。そしてそこから主を恐れ、主にだけ仕える信仰のリバイバルが起こるのです。いかに「主への恐れ」が生きた信仰と深く関わっているか、を思わされます。

果たして私たちに神への恐れはあるでしょうか。私たちも自分に都合良く、神を寛容な方、何でも赦して下さる方、愛の方、いつも私の人生にともにいて幸福を与えて下さる同伴者としてのみ捉えていることはないでしょうか。そうしてイスラエルと同じように、神を私にとっての便利屋のように考え、ただ神を利用し、御名を軽んじていることはないでしょうか。ある人は、最

近キリスト教の中に馴れ馴れしい語り口の祈り方やセンチメンタルな賛美が増えて来てはいないかと警告しています。まるでそういう祈り方や振る舞いが主と特別に親しい関係にあるしるしのように考えられている風潮はないか、と。私たちは注意しなければなりません。ある人は「神知識の欠如を象徴するのは敬虔な恐れがそこにあることだ」と言っています。すなわち神を本当に知っている人は、敬虔な恐れがそこにあるということです。その恐れが言葉や行ないの隅々に行き渡っているかどうかで、その人が本当に神を知っているかどうか分かる。旧約の神だけが厳しい方ではありません。使徒の働き 5 章には、アナニヤとサツピラ夫妻が主を試みて恐ろしいさばぎに会ったことが記されています。ガラテヤ 6 章 7 節には「思い違いをしてはいけません。神は侮られるような方ではありません。人は種を蒔けば、その刈り取りもすることになります。」とされています。ヘブル書 12 章 29 節には「私たちの神は焼き尽くす火です。」とあり、前の節には「こうして私たちは、慎みと恐れとをもって、神に喜ばれるように奉仕をすることができるのです。」とあります。私たちは神をこのようなお方として知っているでしょうか。それとも都合の良い部分だけつまみ食いし、自分の勝手なイメージで「神様、神様」と言いながら、結局は神の上に立ち、神を利用しているだけということはないでしょうか。

私たちはどうしたら良いのでしょうか。主を恐れる者として、いつも自分の罪を眼前に保ち、ビクビクしていなければならないのでしょうか。ベテ・シメシュの人々の叫び、「だれが主の前に立ちえよう！」という言葉を自分の叫びとして発する時、私たちは神が私たちに備えてくださった福音を思わずにいられません。すなわち主の前に立ちえない私たちを、神が恵みによって立たせてくださる。御子イエス・キリストの尊い十字架の犠牲を通して立たせて、受け入れてくださるということです。その神を仰ぐなら、私たちは一層の恐れを抱いて礼拝してこそ当然でしょう。私はもう赦されたからと言って、馴れ馴れしい態度を取るの浅はかです。神への感謝、賛美、愛は、「恐れ」と調和します。詩篇 2 篇 11 節：「恐れつつ主に仕えよ。おののきつつ喜べ。」ここに「恐れ」と「喜び」が両立しています。新共同訳聖書では「おののきつつ、喜び躍れ。」となっています。これが大事でしょう。このおののきとセットになってこそ、私たちの喜びは正しい喜びとなり、また一層大きな喜びとなるでしょう。

私たちは改めて主の前でふさわしい恐れを持つ者でありたいと思います。主は恵み深い方だからと言って、私たちが高ぶり、上から神を利用しようとするようであってはなりません。主は他の人の罪には厳しいが、私の罪は大目に見てくれると考えてはなりません。ベテ・シメシュの人々は激しく打たれました。そのことを心に刻んで、正しい主への恐れ敬いが私たちの内に培われますように。そして主を恐れ敬っていることを、みことばに注意して耳を傾け、それを守り行なう生活に現わして、恐ろしいほどの聖なる方が私たちと共にいて今週も導いてくださること

を知る喜び、その方の前でおのきつつ喜び踊るという真の幸いな歩みへ導かれて行きたいと思
います。